

旭川医科大学保健管理センターの設置

昭和 59 (1984) 年といえば、明けて早々、当時の中曽根康弘首相が現職首相として戦後初めて年頭に靖国神社を参拝した。5 月には自民党安全保障調査会が防衛費の対 GNP 1 パーセント枠の見直しに着手し、同じ日、日・米・豪・カナダ・ニュージーランドが参加して環太平洋合同軍事演習 (リムパック'84) が始まった。総理のこのようなタカ派的な手法は国の内外から強い批判を浴びた。その一方で中曽根内閣は、8 月には日本専売公社、12 月には電電公社の民営化のための法案をそれぞれ可決・成立させ、行財政改革の本丸に突き進んでいった (民営化は翌年 4 月)。

この年の事件・犯罪に眼を向けてみよう。1 月には週刊誌「週刊文春」が貿易商の三浦和義氏をターゲットに「疑惑の銃弾」と題する記事の連載を開始し、以後、いわゆる「ロス疑惑」報道がテレビや雑誌で過熱していった。3 月には大阪で現金 1000 万円を奪う銀行強盗事件が発生したが、犯人は現職の警部補であった。同じ 3 月、江崎グリコ社長が自宅で誘拐され、製品に毒物を混入し食品企業を相次いで脅迫する「グリコ・森永事件」の発端となった。7 月には、熊本市の食品業者が製造した「辛子れんこん」によるボツリヌス菌中毒が全国に及び、死者は 11 人を数えた。

この年の 5 月には NHK が衛星総合テレビ放送を開始した。11 月には日本銀行が 15 年ぶりに新札 3 種を発行した。図柄は 1 万円札が福沢諭吉、5000 円札が新渡戸稲造、1000 円札が夏目漱石であった。ヒット曲には「ワインレッドの心」(安全地帯)、「北の蛍」(森進一)、「もしも明日が…」(わらべ)、「涙のリクエスト」(チェッカーズ) など、ヒットした映画には「お葬式」(伊丹十三監督)、「風の谷のナウシカ」(宮崎駿監督)、「インディ・ジョーンズ=魔宮の伝説」(ステイブ・スピルバーグ監督) など、流行語には「スキゾ・パラノ」「軽チャー」「くれない族」などがあつた。

さて、わが旭川医科大学に眼を向けると、この年の特筆すべき出来事としては、4 月に保健管理センターが運営を開始したことがあげられる。そこに至るまでの経緯を振り返ってみよう。

昭和 58 (1983) 年 2 月、当時の厚生補導委員会において保健管理センター設置要求に必要な事項について検討が開始された。文部省基準や既設大学の資料を参考にして概算要求の原案などが着々と準備された。同年 10 月には、設置された場合のことを考えて具体案を検討する段階となり、石井兼央副学長・内科学第二講座教授 (当時) を委員長とするメンバー 5 名の小委員会が発足し、同委員会は頻回の会議を持って保健管理計画および規程の原案を作成した。

12 月の厚生補導委員会では、この規程案に沿って、協力を求める医師・専任教官などについて審議され、大筋として次のことが了承された。(1) 健康相談を実施する方向で考える。(2) 健康相談室を設けるが、これについては病院側の協力を得ることが条件となる。(3) 専任教官は学生の健康管理に熱意を持ち、精神衛生面についても対応できる人とする。

翌昭和 59 (1984) 年 1 月、大蔵省 (当時) からセンター設置の予算が内示された。定員は講師 (カウンセラー) 1 名、看護婦 (現在の呼称では看護師) 1 名であった。この内示に基づき、2 月の委員会では、上記 (3) の教官は心理学専攻で実務経験のある人が望ましいとの見解に達した。さらに 3 月の教授会において、「旭川医科大学保健管理センター規程」および「旭川医科大学保健管理センター運営委員会規程」が制定された。

そして 4 月 12 日、めでたく同センターが設置され、所長代理に石井副学長が就任した。5 月 1 日にはセンター保健婦 (現在の呼称では保健師) として玉川憲子技官が発令された。8 月 1 日、初代所長に保坂明郎眼科学講座

教授（当時）が就任した。初年度の予算はわずか48万円であったが、翌昭和60（1985）年度からは約250万円の予算が計上されるようになった。初年度から昭和63年度までの5年間にわたる学生のセンター利用状況等については、センター発行の『保健管理センター年報』創刊号（1990年1月刊）に詳述されている。その中から当時の統計資料2点を下に引用する。

初年度の保健管理センター運営委員会のメンバーは14名で、委員長は保坂所長（当時）が務めた。委員は、山村晃太郎衛生学講座教授（厚生補導委員会委員）、小野寺壮吉内科学第一講座教授（附属病院運営委員会委員）、宮岸勉精神医学講座教授（同）、大河原章皮膚科学講座教授（教務委員会委員）、美甘和哉生物学教授（同）、岩渕次郎心理学教授（厚生補導委員会委員）、出光尚敏総務部長、高橋恵一教務部長のほか、センター非常勤医師5名からなっていた（いずれも肩書きは当時のもの）。

施設（総面積220平方メートル）の工事は10月に着工し、新築完成したのは翌昭和60（1985）年の3月9日のことであった。同月には専任のカウンセラーとして酒木保講師が着任し、ここによやく同センターのソフト・ハード両面がいちおう完備された。ちなみに、センター設置に合わせて制定された上述の規程および運営委員会規程は、センター設置から約27年が経過した平成23（2011）年1月においても、基本線においてはほとんど変更を加えられないまま命脈を保ちつづけている。

なお、本稿の執筆にあたっては、学外事象の事実関係は『新訂版 昭和・平成史年表』（平凡社2009年）、学内事象の事実関係は広報誌「かぐらおか」第42号（1985年1月1日付）所収「保健管理センター所長に就任して」（保坂明郎初代所長執筆）に依拠した。（歴史・哲学 藤尾 均）

図1 内科検診受検率（学部）

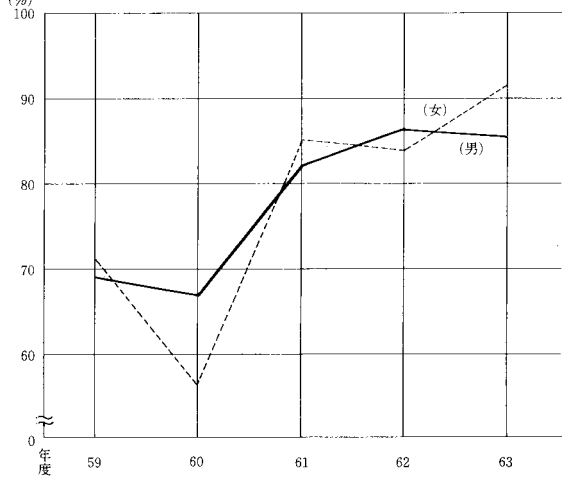
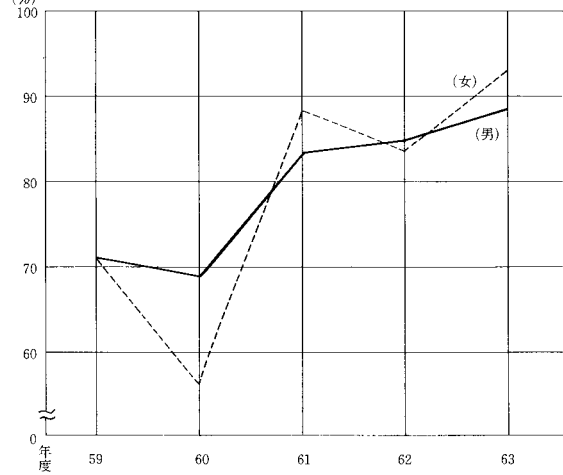


図2 胸部X線検査受検率（学部）



（お詫びと訂正）

前号の記事「回顧資料（11）」には、開学10周年記念行事の一環として行われた「記念植樹式」について、その担当責任者が森茂美生理学第二講座教授（当時）であった旨、記載されていますが、これは誤りで、正しくは小野一幸解剖学第一講座教授（当時）でした。御指摘くださった小野一幸名誉教授に深謝申し上げ、ここにお詫びし訂正いたします。